

身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「六道義・八難義・十二入義・十八界義」翻刻

田 戸 大 智

Republication of *ṣaḍ-gati* 六道義, *aṣṭa-akṣaṇāḥ* 八難義, *dvādaśa-āyatanāni* 十二入義, and *aṣṭādaśa-dhātavaḥ* 十八界義 in *Eight Chapters on The Daijyo Gisyō Syō* 大乘義章抄 (a commentary on *The Dacheng Yizhang* 大乘義章) owned by Minobu Bunko

Tado Taichi

In *The Daijyo Gisyō Syō*, comprising 13 chapters, owned by Minobu Bunko, debates on each item in *The Dacheng Yizhang* were summarized by Kanjin 寛信 (1084-1153) of Kajuuji Temple 勧修寺. The content of this work indicates that *The Dacheng Yizhang* was widely recognized as an important document in the Sanron School to complement the religious doctrines of Jizang 吉藏 (549-623) in the context of Buddhist monks having learned both Sanron School and Shingon Esoteric Buddhism since the Heian Period (794-1185). Therefore, it is thought that by comparing and investigating various materials, including the Sanron School and *Hosshōji Mihakkō Mondōki* 法勝寺御八講問答記 texts, deciphering *The Daijyo Gisyō Syō* will enable a focused study of the issues debated in the Sanron School since the medieval period. The texts were owned by temples such as Todaiji Temple 東大寺 that provided the basis of the Sanron School. *The Hosshōji Mihakkō Mondōki* was written by Soshō 宗性 (1202-1278) of Todaiji Temple.

Continuing from my previous paper, this paper contributes to the basic research on *The Daijyo Gisyō Syō* by presenting a partial republication of the last four items (*ṣaḍ-gati* 六道義, *aṣṭa-akṣaṇāḥ* 八難義, *dvādaśa-āyatanāni* 十二入義, and *aṣṭādaśa-dhātavaḥ* 十八界義) from nine in *Eight Chapters on The Daijyo Gisyō Syō*. The republication of all the nine items in *Eight Chapters* is thus completed by this paper.

Debates in the republished *Eight Chapters* are partially common to debates in *The Gisyō Mondō* 義章問答 owned by the Todaiji Temple Library. Therefore, it can be confirmed that by around 1136 保延 2 年, when the *Daijyo Gisyō Sanjyukko* 大乘義章三十講 (thirty discourses of the *Dacheng Yizhang*) was said to have been started at Todaiji Temple, most of the essentials of each debate had been determined, the content of each debate was summarized in *The Daijyo Gisyō Syō* and *The Gisyō Mondō*, and the debates were communalized by both the Nara and Tendai schools of Buddhism.

身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「六道義・八難義・十二入義・十八界義」翻刻

田戸大智

一 解題

身延文庫蔵「大乘義章抄」十三帖は、勸修寺法務寛信（一〇八四～一一五

三）が浄影寺慧遠（五三三～五九二）撰とされる『大乘義章』の各義科に関する論義をとりまとめた資料である。その内容から、平安期以降に醸成された三論と密教の兼学化を背景に、『大乘義章』が吉蔵（五四九～六二三）の教を補完する三論宗の重要文献として強く認知されていたことが窺われる^①。したがって、同書の解説を基軸としながら、三論宗の拠点であった東大寺や真福寺大須文庫等が所蔵する、論義資料を含む三論宗聖教、更には東大寺の宗性（一一〇二～一二七八）が筆録した『法勝寺御八講問答記』をはじめとする各種問答記等との比較検証を進めることで、中世以降の三論学派がどのような課題を議論していたのか、より具体的に考究することが可能になると想定されるのである^②。

そこで、本稿では、前号に引き続き、同書十三帖の一つである「大乘義章第八抄」に収録される九義科の中、最後の四義科である「六道義・八難義・

十二入義・十八界義」の部分翻刻を提示し、基礎研究の一助としたい。「大乘義章第八抄」の九義科については、既に「二種生死義・四有義・四識住義・四食義・五陰義」の五義科を翻刻済みであり、本研究にて全義科の翻刻が完了した^③。

それでは、本稿で翻刻した四義科について、他資料との対照により判明した注目点を些か概説することにした。まず着目すべきは、「十二入義」第十九問の論義である。そこでは、十八界中の六識を意人に撰するべきか、法人に撰するべきかという問題が議論されているが、実は東大寺図書館蔵『義章問答』巻二・第二十三問にも同様の内容が収録されている。同書は、頼超（生没年未詳）が東大寺北院で養和二年（一一八二）に書写したことが巻五の奥書から看取され、その成立時期は「大乘義章抄」より少しばかり下がる。当該の問答を摘記すれば、次のとおりである。

問。成実意、付_レ明_二十八界・十二入開合、且開_二何人_一為_二六識界_一耶。

答。法人之中、開分_二六識_一云。……

『義章問答』には、右の記載に続けて関連する問答や証憑となる『大乘義章』や『成実論』等が引用された後、「久安二年（一一四六）最勝講 天台弁

「實際珍海已講」という註記があり、珍海（一〇九二、一説一〇九一〜一一五二）が講師として同論義を先導していたことが知られる。この最勝講は宮中最勝講、或いは仙洞最勝講のいずれかであると推測され、寛信が「大乘義章第八抄」を抄筆した天養元年（一一四四）とほぼ同時期に格式が高い法会での議題が修学対象となっていたことは注目に値すると言えよう。

更に、同じく東大寺図書館蔵『法勝寺御八講問答記』によれば、建長三年（一二五二）初日朝座にも、次のように同様の論義が簡潔に記されている。

初日朝座講師定親 問者最千 在表白

問。淨影大師付_レ判_二十八界・十二入開合不同_一、且成実論意開_二何入_一立_二六識界_一耶。答。

この朝座で講師を勤めた定親（一二〇三〜一二六八）は、仁和寺で密教を授け法し東大寺別当・東寺長者等を歴任した学僧である。右の問答は前掲の『義章問答』の表記とほぼ同工であることから、東大寺にて「大乘義章三十講」が始行されたとされる保延二年（一一三六）頃、すなわち十二世紀前半頃までに各議題の綱要がほぼ固まり、「大乘義章抄」や『義章問答』等とその論義内容が集成され、それ以降、南都北嶺双方にわたって議論の共有化が促進されていったと推考することができよう。^④

この他、「大乘義章抄」には慧遠の著作類が吉蔵よりも優先的に引証される事例が多く、「六道義」には『地持経義記』卷二の逸文が見出され、また「十二入義」「十八界義」から逸書である百濟・道蔵撰『成実論疏』からの引用が二カ所抽出できる点も特筆すべき事項である。^⑤ その詳細な内容分析は、今後の研究に委ねたい。

二 凡例

- 一、本稿は、身延文庫蔵「大乘義章抄」十三帖の一である「大乘義章第八抄」に収録される四義科（二種生死義・四有義・四識住義・四食義・五陰義・六道義・八難義・十二入義・十八界義）の中、「六道義・八難義・十二入義・十八界義」の箇所を部分翻刻したものである。
- 二、本翻刻は、原則として新漢字を使用した。
- 三、底本には一部送りがなが付されているが、句読点のみ私に付した。
- 四、原文では、問答箇所が引用典拠箇所より一段下げになっているが、翻刻ではすべて行頭を統一した。
- 五、校訂者の解釈により、全体を問答ごとに分割し、冒頭に【】で問答番号を挿入した。
- 六、原文の異体字や略字、俗字等は基本的に現行の正字に改めた。
余↓爾 畧↓略 導↓礙など
- 七、以下の文字は本来別字であるが、慣用に合わせて置き換えた。
尺↓釈 脩↓修 廿↓二十 卅↓三十
- 八、以下の仏教省文草体は、本来の形に還元した。
𠂔↓涅槃 井↓菩薩 井↓菩提 めめ↓婆娑 冗冗↓煩惱
- 九、脱字や誤記の註記は、原文どおり行間に記した。
- 十、中略の箇所は、原文と同じく○で示した。
- 十一、虫食いや判読不能の箇所は、□を用いて示した。
- 十二、装幀の糊付けにより判読不能の部分で、引用典籍の原文から補える箇所

所は（ ）を用いて記した。

十三、『大乘義章』や『法華義疏』等からの引用文は、原文との校異を行い註で示した。

十四、書誌的概要は、次のとおりである。

〔書写年代〕 文和四年（二三五五）

〔書写者〕 寥海

〔外題〕 大乘義章八

〔内題〕 二種生死義

〔尾題〕 大乘義章第八抄

〔奥書〕

本云、天養元年（一一四四）十一月十九日始抄、同二十四日期畢之。始自保延二年（一一三六）、相当先妣四月二十四日遠忌、勤修三十講九箇年。于茲以義章兩卷、為其宛父、為小生等、遂歲抄集要文。而今年重病相纏、講筵遲怠、當于年迫愁以行之。非是宿病之愈、不闕當年之勤也。七八兩卷馳筆抄之。老病危免、心肝如春。生年六十一、後見哀憐矣。

天養元年（一一四四）十一月二十四日 權大僧都 寛信記

治承元年（一一七七）九月十日 隆円書之。二交了。

文和四年（二三五五）紀十一月二十九日書之了。小比丘寥海三九通七

〔墨印〕 身延文庫

粘葉装、表紙（茶）、楮紙、一帖、全四九丁、縦二七・五糎、横二〇・〇糎、一頁二一行、一行約二〇字前後

三 目 次

六道義

【第一問】 問。翻阿修羅為不酒神。如何积之乎。

【第二問】 問。引涅槃經积阿鼻地獄

【第三問】 問。以修羅撰余趣。爾者、撰幾趣乎。

【第四問】 問。喜見城高量幾乎。

【第五問】 問。日月星等、四天王天撰歟。

【第六問】 問。日月星等寿量如何。

【第七問】 問。雜心論、心色界立幾天乎。

【第八問】 問。地持論意、色界立幾天乎。

【第九問】 問。自在天者、第四禪撰歟。

【第十問】 問。以六道分別善惡二道、明修羅道義。何判之乎。

八難義

【第一問】 問。以三途立八難、有何故乎。

【第二問】 問。鬼子母聞法得道、引何經文乎。

【第三問】 問。付八難、何処名長寿天乎。

十二入義

【第一問】 問。成実論心、識想受行四心所生意識名意入乎。

【第二問】 問。成実心、积意入有三義。且第二約心、四心所生五識名意入乎。

【第三問】 問。成実心、立五意識乎。答。爾也。

【第四問】 問。成実心、意識無局起第二念意識乎。

【第五問】問。成実心、雲煙塵霧可云色入撰乎。

【第六問】問。成実心、非鼻根所緣香塵可有乎。

【第七問】問。毗曇心、觸境有幾種乎。

【第八問】問。成実心、觸境有幾種乎。

【第九問】問。付成実、触数且第五・第十一、其名如何。

【第十問】問。成実心、以猗窠可名触乎。

【第十一問】問。成実心、付以色等五塵分別假実。爾者、可云唯実乎。

【第十二問】問。成実心、過未五塵、假実中何乎。

【第十三問】問。成実心、意根通三世乎。

【第十四問】問。大乘意、於上二界可云有香味二塵乎。

【第十五問】問。成実意、耳根唯可云離中知乎。

【第十六問】問。成実心、色声二塵通因果乎。

【第十七問】問。成実心、眼等五根可云通報非報乎。

【第十八問】問。成実、声塵可云非報乎。

【第十九問】問。成実心、十八界中六識可云意人所撰乎。

十八界義

【第一問】問。眼等五根、可見有对。三種对色、何撰乎。

【第二問】問。付以十八界分別内外、且成実心、六識何撰乎。

【第三問】問。成実心、意根可通三性乎。

【第四問】問。成実心、色声二塵可通三性乎。

【第五問】問。毗曇心、五識通三性義、如何积之乎。

【第六問】問。成実心、五識通三性乎。

【第七問】問。付於十八界分別三性、且大乘意諸仏菩薩実報境界、何判之乎。

【第八問】問。毗曇、以十八界分別自地化地時、觸境為化地、識為所緣乎。

【第九問】問。大論意、意識可緣三世境乎。

四本文

六道義

【第一問】

問。翻阿修羅為不酒神。如何积之乎。進云、不知何義名不酒神云。付之、見嘉祥积之、過去持不飲酒戒報得此名。或集花釀海為酒不成故云無酒云。此积叶文理。何云不知何義乎。

章云、阿修羅者、是外国語。此名劣天。又人相伝名不酒神。阿之言無、修羅名酒。不知何義名不酒神云。

義疏一云、阿修羅者、此云無酒。或言、過去持不飲酒戒報得此身。或云、集諸花釀海為酒不成故云無酒。毘婆沙云、阿之言無、修羅云端正。謂無端正。

以男醜女好也。因醜立名。积道安通別經、胡音云修羅、此云質諒。其以多諂曲故為立此名。令其質直誠信。諒即信也。婆藪伝云、非天、亦言非善戲。諸天以善汁戲樂。其多作不善戲樂也云。

【第二問】

問。引涅槃經积阿鼻地獄 [] (装丁の糊付けにより、判読不能) 進云、千倍云。付之、涅槃經無此文、如何。

章云、阿鼻地獄、如涅槃説。此獄縱広八万由旬。其中苦事過前七獄及余別処。

是一千倍云。
涅槃經十七云

【第三問】

問。以修羅撰余趣。爾者、撰幾趣乎。進云、天·鬼·畜。或鬼·畜二趣撰云。
付之、大仙頂經有四种阿修羅。如人所撰、何不說之乎。

章云、次弁修羅。依伽陀經、修羅有三。一天、二鬼、三者畜生。法念經中、
唯說二種。鬼之与畜。鬼修羅者、是其殺身餓鬼所撰、住在地上衆相山中。畜
修羅者、住在北方須弥山側海底地下。四重之別。入地二万一千由旬、有其羅
睺阿修羅住地。○羅睺修羅、是師子兒。○次下二万一千由旬、是其勇健
修羅住地。○次下二万一千由旬。有其華鬘修羅住地。○次下二万一千由旬、
有鉢訶婆毘摩質多修羅住地云。

大仙頂經云、有四种阿修羅類。若於鬼道以護法力成通入空、此阿修羅從卵而
生、鬼趣所撰。若於天中降德貶墜、其卜居隣於日月、此阿修羅從胎而出、人
趣所撰。有修羅王執持世界力洞無畏。能与梵王及天帝釈四天爭權。此阿修羅
因变化有、天趣所撰。阿難、別有一分下劣修羅。生大海心沈水穴口、朝遊虛
空暮（歸水宿。此阿修羅因湿氣有、畜生趣撰云。）

【第四問】

問。喜見城高量幾乎。進云、八万四千由旬。
付之、彼城高量既与須弥等。甚乖道理故。俱舍論高一半金城云。是一踰繕
那半也。其高有八万四千由旬者、不順周圍量山頂。又以一万四千由旬。四面
各有八天。如何建立乎。

章云、第二天者、名切利天。此翻名為三十三天。在須弥頂。○中有帝城。
名曰喜見。亦高八万四千由旬。帝城四面、各有八天。臣民所居云。

【第五問】

問。日月星等、四天王天撰歟。進云、不撰云。付之、婆娑·俱舍等、皆四
天王天撰云。何難此积乎。

【第六問】

問。日月星等寿量如何。
章云、問曰、欲界日月星天、何天所撰。积言、随近四天王撰、随别分之六天
不收。何故如是。四天王天、是其地居。彼是空居。又六欲天、寿命短促。此
寿一劫。是故不撰云。
起世經云、諸龍及金翅鳥等、寿命一劫云。

【第七問】

問。雜心論、心色界立幾天乎。進云、十八天云。付之、十八天者、上座部
義也。毗曇、全無此說。況雜心論有二義。十六天或十七天云。如何。
雜章云、若依雜心·地持論等、有十八天。初·二·三禪、各有三天。第四禪中
猶有九天。故合十八云。
（雜心論八云、答。二十說欲界、色界或十六、無色界有四、）其所次第說。○
色界或十六者、謂梵身·梵富樓·少光·無量光·光音·少淨·無量淨·遍
淨·無陰·福生·果實·無煩·無熱·善見·善現·色究竟。此十六天說色界。
有欲令十七。如前十六及大梵。彼衆生受色身、非衆具。非第二。是故說色界云。

疏八云、十六是闕賓義。有人云、十七是西方說云。

同論二云、○上列四洲六欲天略之色界梵天 ○ 梵福樓天 ○ 大梵天 ○ 少光天 ○ 無量光天 ○ 光音天 ○ 少淨天 ○ 無量淨天 ○ 遍淨天 ○ 福愛天 ○ 福生天 ○ 広果天身、五百由延。無想天身亦爾。無希望天身、千由延。無熱天 ○ 善見天 ○ 善現天 ○ 色究竟天 ○云。惠口疏無釈私云、四州・六欲・色界・十八天皆云說身量不同。無想天望広果人云亦然也。

【第八問】

問。地持論意、色界立幾天乎。進云、十八天云。付之、扱彼論出十七天。義記任論釈之。何令相違乎。甚難

章云、如上

地持論二云、梵身天、梵衆天、大梵天、少光天、無量光天、光音天、少淨天、無量淨天、遍淨天、無障天、福生天、広果天、凡夫、無熱天、善見天、善現天、色究竟天云。

義記二本云、梵身・梵衆及以大梵、是初禪天。○ 小光・無量光・光音、是第二禪天。○ 少淨・無量淨・遍淨、是三禪天。○ 無障・福生及□広果、是四禪天。□(装丁の糊付けにより、判読不能) 四禪但那舍人、無漏熏初生彼身中云。

珍海已講・寬嚴得業等云、十六・七・八天者、雖諸部不同、大小乘常義也。

以此中十八天為多種之義也。就之、雜心・地持、雖不出見文任普通說。付其中多種歎之義釈十八天也。大論・花嚴、下三禪說四天異常途說也。对之云爾歎云。

【第九問】

問。大自在天者、第四禪撰歟。

章云、若依花嚴、色界具有二十三天。初禪有四。○ 二禪有四。○ 三禪有四。○ 四禪有十。当分有四。○ 第四禪中、隨其別修更有六天。謂無想天及五淨居。○ 以此通前為二十一。依大智論、五淨居上、別更有一菩薩淨居、名摩醯首羅。此方名為大自在天。是第十地菩薩住処。以此通前、色界合有二十三天云。

尋云、摩醯首羅者、即色究竟天也。処処所說非一。何云非所撰乎。

又尋云、花嚴經出第四禪說十処、大論說八天。其意遙異。以大論大自在天加花嚴、說為十一処乎。

大論九云、第四禪有八種。五種是阿那含住処、是名淨居三種。凡夫、聖人共住。過是八処、有十住菩薩住処。亦名淨居、号大自在天王云。

大吉祥神咒經云、摩醯²⁶首羅、処在阿那含聖果云。

大乘百福經云、第四禪梵王摩醯首羅云。

【第十問】

問。以六道分別善惡二道、明修羅道義。何判之乎。

進云、或云善道、或云惡趣、有二意也。付之、法花等經云惡趣所撰云。正法念処經判鬼畜撰。小乘偏又鬼道撰也云。如何。

章云、弁其因。因有通別。通而論之、唯善与惡。善謂十善、惡謂十惡。十善是其三塗通因、十善是其人・天・修羅三趣通因。故龍樹言、惡有三品。謂下中上。下生餓鬼、中生畜生、上生地獄。地經之中亦同此說。善亦三品。下生修羅、中善生人、上善生天。問曰、修羅四惡趣撰。何故論言下善生中。釈言、

修羅雜業所招。是雜業中有善有惡。惡業得彼總報之果。故名惡趣。善業得彼別報樂受。是故名為下善生也。又復惡業得彼正報。故名惡趣。善得依果故、說善生。問、諸余鬼畜等中亦有樂受。並為善生。何故偏言善生修羅。積言、修羅樂受增上。如經中說。修羅所受、其次如天。是故偏言善生修羅云。

八難義

【第一問】

問。以三途立八難、有何故乎。進云、報障深重、不能會聖云。付之、經論中多說三途得道、如何。

【第二問】

問。鬼子母聞法得道、引何經文乎。進云、長阿含經。付之、長阿含無此說、如何。

(章云、所言地獄·鬼·畜難者、一切三塗。報障深重、無能)會聖。是故為難。問曰、若使三塗是難、無會聖者。是義不然。如方等說。有諸衆生、在地獄中。遇仏光明、尋光詣仏、聞法得道。如龍樹說。鬼畜兩趣、聞仏說法、有得道者。如長阿含天品中說。鬼子母神、聞法得道。如提胃經。諸龍鬼等、聞仏說法、亦皆得道。三塗之中、不妨會聖。云何是難。積言、三塗是障難處、不応得道。但有衆生久習勝因。遇墮三惡、今值如來及大菩薩不思議力、為強緣故、有得道者。如難陀等。煩惱障纏、不応得道。仏為緣故、得人聖道。此亦如是。無有自力及舍利等小因緣故、能入聖道。故名為難。又三惡中、值聖得道。多是權人、為引余生令起出心。示有所得。非是實凡。實凡不得故名為

難云。

九業義云、依雜阿含天品之中、有鬼神母。名富那婆藪。仏為說法得人聖道。案如彼文、鬼道亦得起無漏業云。

雜阿含經四十九云、仏在摩竭提國人間遊行与大衆俱。到富那婆藪鬼子母住処宿。爾時、世尊為諸比丘說四聖諦相應法。○爾時、富那婆藪鬼母、兒富那婆藪及鬼女鬱多羅、二鬼小兒夜啼。時富那婆藪鬼母教其男女故。而說偈言、³⁰富那婆藪 鬱多羅莫啼 令我得聽聞 如來所說法 非父母能令 其子解脫 苦 聞如來說法 其苦得解脫 ○時富那婆藪 鬼女鬱多羅 悉受其母語 默然而靜聽 語母言善哉 我亦樂聞法 ○從此四聖諦 安穩趣涅槃云。

【第三問】

問。付八難、何処名長寿天乎。進云、色無色界云。付之、色無色界者、聖人所生已得。聖子、何云難處乎。付之、或処以無想天名長寿天、如何。

章云、長寿天者、色無色界命報延長。下極半劫、名長寿天。彼天之中寂靜安穩。凡夫生彼、多謂涅槃、保著情深。又無仏法可依求出。所以是難。問曰、經說生般涅槃·行·無行等皆在長寿得涅槃果。云何說言長寿是難。積言、難者、就凡以說。彼生般等、是那舍人、□上得滅。是以無過云。

十二入義

【第一問】

問。成實論心、識想受行四心所生意識名意入乎。進云、法入云。付之、已

是意識也。可名意入、何撰法入乎。況論無此說、如何。
私云、能生云根云入。扱之、所生色撰法入也。

【第二問】

問。成実心、釈意入有三義。且第二約心、四心所生五識名意入乎。進云、爾也。付之、此約心意識、五識簡別扱之。故五識以前能生四心撰法入不名意入云。故又所生五識不可名意入、如何。

私云、五識雖非意識、能生意識故、此問尚名意入。五識以前四心、雖生五識、乃異□也。微細也。能□

章云、第二弁休門次弁意入。○若依成実、義釈有三。一、通相以論。一切四心以前生後、悉是意根。同名意入。從前生義、齊名意識、法入所收。二、簡別五識。除生五識、自余一切識想受行以前生後、悉是意入。扱此一門、五識已前次第滅心、是法入收。非是意入。三、對別名意識以明意入。識想受行四心之中、局唯分取行末之心生意識者、以為觸入。意余者皆是法入所撰云。

章下文云、第五對陰分別若依成実、隨義通論。一切四心能生後義、悉是意入。一切心識從前生義、悉屬法入。若簡五識、五識已前次第滅心、是其法入、余皆意入。皆是通名意根撰故。若當對彼別名意識、行末之心生意識者、是其意入、余皆法入云。

【第三問】

問。成実心、立五意識乎。答。爾也。付之、彼論無之、如何。

【第四問】

問。成実心、意識無局起第二意識乎。答。不起意識也。後必起想受行也。付之、若爾、意識相統之義、如何成乎。況本論証扱何在。答。如四心住義抄。可見之

章云、第三弁相門次弁意入。○成実法中、意有通別。行末之心生意識者、以之為別。一切四心生後為意、以之為通。別名之意義別有三。一、五識後行末之心生意識者、說為意入。二、五意識後行末之心生意識者、說為意入。三者、第六獨頭識後行末之心生意識者、說為意入。若有意識藉前五識開導生者、名五意識。不藉五識開導生者、名為獨頭。別名如是。若論通者、要為四重、廣為十二。言四重者、識想受行能生一切。通名意根、齊名意入。言十二者、五識已後一重四心、五意識後一重四心、獨頭識後一重四心、三重四心各能生後。斯名意根、齊名意入。故有十二云。

成実論十一云、雜問品問曰、經中說六愛衆。云何言五識中無煩惱耶。答曰、如六意行皆在意識中。但以眼等開導故名六意行。是事亦爾云。

【第五問】

問。成実心、雲煙塵霧可云色入撰乎。□法入云。付之、可云色入。例如影光明闇色入撰、如何。

章云、次弁色入。○成実法中無其定數。但彼論中、唯說青黃赤白黑等諸雜之色、以為色塵。自余一切煙雲塵霧方圓長等、皆是假色。法入所收、非是色入。光影明闇、於彼宗中、隨其色相、青黃赤等諸色所撰云。

成実論五云、色入相品又言、青黃等色名為色入。如經中說。眼入滅色相離。是處應知。問曰、有說、業量亦是色入。所以者何。如經中說黑白長短麤細諸色。答曰、形等是色之差別。何以知之。若離色則不生形量等心。若形等異色、

離色亦應生心而實不生。故知不異。問曰、先生色心、後生形心。所以者何。黑白方円心不並生。(答曰、長短等相皆綠色故、意識中生。如先見色然後意識生男女相^云。

私云、雲塵霧等成別形質。何不撰青黃等色也。

【第六問】

問。成実心、非鼻根所緣香塵可有乎。進云、有^云。付之、已云、香塵何非鼻根所好哉。^{緣歟}何例如余塵皆成自根所緣、如何。

章云、次弁香入。○或分二種。如成実說。一、成質香、即香樹等。二、緣生香、依彼香質緣生香氣、離質而去。緣生不同。或時成地。如香熏衣令衣有香。或時成水。如香熏麻令油有香。或時成風。如風經過香樹而來風中有香。或復孤遊更無所成。此二□、成質之香鼻根不聞。緣生香氣來至鼻根、鼻根所得。

成実五云、^{香相品}問曰、多摩羅跋等衆香合故、具香異本。為即此等香更生異香。答曰、因香和合、更生異香。如青黃色雜更生綠色。有以種種業因緣故、生種種香^云。

【第七問】

問。毗曇心、觸境有幾種乎。進云、十五種^云。付之、觸有十一種雜心。爾判何違性相并本論乎。

章云、次弁觸入。○或分十一。如毘曇說。謂堅·濕·燻^{③③}·動·輕·重·洪·滑·冷·飢·渴等。堅是地大、濕是水大、煖是火大、動是風大。此四能造、後七所造。後七雖復四大所造、於中亦有增微不同。如雜心說。火風增故

輕、地水增故重、地風增故洪、水火增故滑、水風增故冷、風增故飢、火增故渴。以義推之、觸心十五。十一如前。更應有四。地火偏增應立強觸。地增故飽、水增故滿。成實中有毘曇不說。四大齊等、應當立一調停之觸。論中不弁。以此通前故心十五^云。

【第八問】

問。成実心、觸境有幾種乎。進云、三十九種^云。付之、見本論出三十四種。何相違乎。

【第九問】

問。付成実、觸數且第五·第十一、其名如何。進云、五強、十一強^云。付之、此兩種、其名全同也、何。

【第十問】

問。成実心、以猗樂可名觸乎。答。爾也。付之、觸是色法、猗樂者心數也、如何。

章云、成実法中、觸無定數。以義推之、有三十九。一堅、二燻^{③⑥}、三輕、四重、五強、六弱、七冷、八熱、九濕^{③⑦}、十滑、十一強、十二濯。此之十二、是其外觸。十三猗樂、身離悩患自覺猗拏故名猗樂。十四疲極、十五不極^{③⑨}、十六病、十七差^{④⑩}、十八身利、十九身鈍、二十身嬾、二十一身重、二十二迷、二十三悶、二十四瞪瞢、二十五疼、二十六痺、二十七頻申、二十八飢、二十九渴、三十者飽、三十一滿、三十二嗜樂。便其所喜故云嗜樂。三十三不嗜。身所不便名不嗜樂。三十四者慵、三十五欠^{④①}、三十六者痛、三十七者痒、三十八者急。

如坐禪人所得急觸。三十九者緩。此後所列二十七種、是其內觸。此諸觸中、前三十四是彼成実觸品中說。後之五種、隨義準置。此等皆是身之所覺故通名觸。問曰、猗等是心數法。云何說之為觸入乎。釈言、觸入皆是色法。寄心顯別云。

成実論五云、觸相品 觸名堅·軟·輕·重·強·弱·冷·熱·洪·滑·強·濯·猗樂·疲極·不極⁴²·若病·若差·身利·身鈍·癩重·迷悶·瞪瞢·疼痺·嘔呻·飢渴·飽滿·嗜樂·不嗜樂·懣等云。

疏七云、問曰、堅孱与強弱、云何果異。答曰、按推得知名為堅孱。把捉得知名為強弱。問曰、強弱与強濯云何異。答曰、把捉草敷單木綿帛等得知名為強弱。把捉沼水和麵得知名為強濯也云。

【第十一問】
問。成実心、付以色等五塵分別仮実。爾者、可云唯実乎。進云、亦実亦仮云。付之、彼論心、五塵唯実也。何云仮乎。

章云、色等五塵、○成実法中、亦実亦仮。五塵之法、止現一念、不通相統、名之為実。又復不攬余塵余大仮以集成故名為実。所言仮者、釈有兩義。一、因和合。攬細成麁。隣空之色、以之為細。多集可見、目之為麁。二、法和合。苦無常等同体虚集故名為仮云。

【第十二問】
問。成実心、過未五塵、仮実中何乎。進云、実云。付之、彼論意、過去法必是仮法也。何云実乎。

章云、次弁法入。○成実法中、隨相以論、有実有仮。過未五塵·三無為等、

是其実法。自余一切我·人·衆生·舍宅·軍衆·叢林·草木·四大等法、悉是仮名。拋理以論、一切諸法悉是仮名。四仮撰故、大乘亦爾云。

【第十三問】

問。成実心、意根通三世乎。進云、唯現在云。付之、何爾乎。
章云、次就三世弁定諸入。○若依成実、六根·五塵、局唯現在一剎那頃。不通過未。在過未者、法入撰故。法入一種、該通三世。以法寛法云。

【第十四問】

問。大乘意、於上二界可云有香味二塵乎。進云、無云。付之、花嚴經中、聞於無色宮殿之香云。法花經聞色界諸天之香云。如何。

章云、次就三界分別諸入。香味二種、小乘法中唯在欲界。上界則無。上界無其段食性故。大乘法中、諸仏菩薩真實報果、不属三界。余則如前。眼等五根、色·声·觸塵、小乘法中定在欲界。大乘法中、若仏菩薩真實報果、不属三界。余通三界。大乘宣說無色界中猶有色故。意入·法入、若無漏者、不属三界。余通三界云。
私云、香者非香塵。菩薩鼻根緣彼色也。委曲証文等、如浄土義抄之。

【第十五問】

問。成実意、耳根唯可云離中知乎。進云、亦合亦離云。付之、唯可云離中知。例如眼根、如何。

章云、成実法中、眼根一種、離而生知。鼻舌及身、合而生知。耳根一種、亦離亦合。耳鳴之声、合而得聞。自余外声、離而得聞云。

成実論四、根塵合 雜品 問曰、汝言識能知非根知。是事已成。今為根塵合故識生、為離故生耶。答曰、眼識不待到故知塵。所以者何。月等遠物、亦可得見。月色不應離香而來。又假空与明故得見色。若眼到色、則間無空明。如眼禪觸眼則不得見。當知、眼識不到而知。耳識二種。或到故知、或不到而知。耳鳴以到故知。雷声則不到而知。余三識皆到根而知。所以者何。現見此三、根与塵和合故可得知。而意根無色故、無到不到云。

【第十六問】

問。成実心、色声二塵通因果乎。進云、一向非因云。付之、為口業中善惡。色声何云非因乎。

章云、次就因義分別諸入。○色·声二塵、論說不同。成実法中一向非因。彼說、五塵無罪福性。是故非因。毘曇法中有因非因。身口業中善惡色声、一向是因。余者非因云。

成実論七云、問曰、若無作是色相有何答。答曰、色声香味觸五法、非罪福性故、不以色性為無作云。

【第十七問】

問。成実心、眼等五根可云通報非報乎。進云、一向是報云。付之、長養眼非報也。又依禪定轉眼令清淨是又非報也、如何。

章云、次就報義分別諸入。○依如成実、一向是報。毘曇法中有報非報。過因生者、說之是報、長養之根及依禪定修習起者、說為非報云。

成実論四、分別根品 問曰、是諸根中、何大偏多。答曰、無有偏多。問曰、若諸大等、何故有能見色、有不能者。答曰、皆從業生。從業生属眼、四大力能

見色。余根亦爾。問曰、若從業生、何故不以一根遍知塵。答曰、此業五種差別。有業能為見因。如施灯燭得眼根報。声等亦爾云。

【第十八問】

問。成実、声塵可云非報乎。進云、唯報云。付之、何爾乎。章云、色等五塵、成実唯報。毘曇法中、声入一種一向非報云。

【第十九問】

問。成実心、十八界中六識可云意人所撰乎。進云、法入云。付之、可撰意入、何。

章云、對界分 別門 若依成実、六根·五塵、十八界中即為十一。法入之中、開分六識、通前合為十八界義。彼宗六識、法入撰故云。

十八界義

【第一問】

問。眼等五根、可見有对。三種对色、何撰乎。進云、不可見無对云。付之、可云不可見有对、如何。

章云、色中別以三門分別。○二、就对分別。色有三種。一、可見有对。二、不可見有对。三、不可見無对。色界一種、可見有对。為眼所行名為可見。為其对礙色根所对故名有对。声香味触、是不可見有对。非眼所行名不可見。有对同前。眼等五根及無作色、是不可見無对。非眼所行故不可見。為意所緣、不為对礙色根所对故、名無对云。

私云、此章并道品章、以五根云不可見無對、不見本文。五陰義引毗曇積三對。眼等五根不出□中。能可尋思之。其文等如道品章積抄。

成実論四云、根不定品 ○ 仏言、諸根是色、因色等成。或謂、因色等成、応可見。故説、不可見亦非耳等諸根所得也。或謂、若爾、便応無對。故説有對。對諸塵故云。

上举非道等三人義。可見之。

疏七云、或謂因色等下、第二答不可見有對。問。就中有二。一、為前三人故、仏説不可見有對義。二、為衛世師故、仏説不可見有對義。論并疏前後文委可抄之云。

觀嚴得業云、以此文五眼無見對無色、可証也。便応無對者、毗曇義歟云。見前後文、可決定。

【第二問】

問。付以十八界分別内外、且成実心、六識何撰乎。進云、外云。付之、實是心法、可云撰内。依之、毗曇等判成実、有何所以乎。

章云、次就内外分別諸界。於中、若就三分論之、六根是内、六塵是外、六識為中。兩分論之、根塵如上、六識不定。毘曇法中、撰之為内。故彼論云、内界説十二。成実不爾。彼宗六識、法入所撰。是則六識撰之在外云。

【第三問】

問。成実心、意根可通三性乎。進云、爾也。付之、彼論心、現在一念立意根。現在是無記也。何通善惡乎。私云、統念為意也。

【第四問】

問。成実心、色声二塵可通三性乎。進云、一向無記云。付之、礼拝讚歎等事是色声、惡心發動身口二業是惡色声、如何。

章云、次就三性分別諸界。○ 依如成実、五根五塵及与五識、一向無記。意根意識及与法界、該通三性。毘曇法中、眼等五根、香味觸塵、一向無記。余通三性。○ 彼宗宣説善心礼拝讚歎等事是善色声、惡心發動身口二業是惡色声。○ 問曰、何故毘曇法中宣説色声該通三性、成実法中唯説無記。釈言、毘曇、身口二業是色声性。故通三性。成実法中、一切善惡皆在假中。實中則無。然彼論中、五塵唯實不通假名。故無善惡。問曰、何故善之与惡唯在假中、不通實法。釈言、彼宗相統之中、方有損益。一念無故云。

【第五問】

問。毗曇心、五識通三性義、如何積之乎。進云、緣善境界起名善緣。可貪可瞋境起名不善云。付之、五識三性可依自性。何任境界判之乎。況香味觸唯無記也。鼻舌身境、何通三性乎。

【第六問】

問。成実心、五識通三性乎。進云、唯無記云。付之、五識、豈不緣善惡境乎。況彼論於五識有亦妙行云。已是通善也、如何。

章云、毘曇法中、○ 五識地中緣善境界而生五識、判之為善。若緣可貪可瞋等境而生五識、判為不善。○ 又問。五識、毘曇法中説通三性。何故成実説唯無記。釈言、毘曇不立假義。宣説善惡皆在實中。是故、一念五識之中得有善惡。成実、善惡假中方有。五識唯實。故無善惡。又復毘曇、心法同時。五識心辺、有善惡数。以王從数故説善惡。成実法中、心独不並。五識心起直了

五塵。更無余義故無善惡。問曰、若使成實法中五識無記無善惡者、五識之心
應非妙行。積言、彼宗五識心体、實非妙行。五識心後、行中無過、方名妙行云。
光云、問。眼耳意識、及与意根、皆通三性。鼻舌身識、不善無記。此並可知。
鼻舌身識、起善云何。解云、若汎爾起者、三識非善。若修行者、觀⁵⁰察段食等、
深生厭離心、能起善三識云。

【第七問】

問。付於十八界分別三性、且大乘意諸仏菩薩實報境界、何判之乎。進云、塵
通三性云。付之、諸仏境界、何通善惡哉。例如根識唯善。又有為無為唯無
為也。漏無漏分別唯無漏也。學無學分別唯無學也。例難皆等、如何遮之乎。
章云、次就三性分別境界。○大乘所說、凡夫二乘与毘曇同。諸仏菩薩實報
境界、根識唯善。塵通三性云。
章下文云、次就有為無為分別。○大乘法中、諸仏菩薩真實根識、体則無為。
用現有為。六塵之中、三無為法、一向無為。自余一切、就仏菩薩實報說者、
是其無為。余者有為云。

又云、次就有漏無漏分別。○大乘法中、諸仏菩薩實報根識、体則無漏。用⁵¹
現有漏。六塵之中、通漏·無漏。色等五塵、就仏菩薩實報說者、是其無漏。
余是有漏。法塵之中、數滅無為、一向無漏。余如五塵云。

又云、次就學等分別諸界。○大乘所弁、凡夫二乘十八界法、与小乘同。○
一切如来實報境界、根塵及識、是其無學。余者非學及非無學云。

又云、就三斷分別諸界。○大乘法中、十八界法皆通三種。初地所除一切生
死十八界法、斯名見斷。二地已上一切所除十八界法、是其修斷。諸仏菩薩實
報所成根識、無斷。塵通三種云。

【第八問】

天養元年東大寺三講、理具
問。毗曇以十八界分別自地化地時、觸境為化地、識為所緣乎。進云、不爾
云。付之、生二禪以上者、借初禪身識、覺上地觸。是豈化地識非緣異地觸
乎。例如眼耳識緣化地色聲、如何。

章云、次就自地他地分別。言自地者、身在欲界、於自地中、根塵及識、一切
具足。身在初禪、於自地中六根具足。塵但有四。○身在二禪乃至四禪、於
自地中六根四塵与初禪同。識則不同。毘曇法中、但有意識。余識皆無。若無
余識、云何而得得見色聞聲覺觸等事。彼論宣說、二禪已上借初禪識故、得見
色聞聲覺觸。○言他地者、鼻舌身根及彼根識、唯当地起不通他地。眼耳意
根及此根識、身在下地。於上地中、隨所有處、皆悉得起。六塵之中香味及觸、
唯為自地根識不了、不通他地。無玄知故。色界声界、小乘法中、四禪已還、
隨身何處、於他地中皆得見聞。不通無色。○問曰、有人、身在欲界用初禪
眼、見自地色及他地色。所生眼識、何地所撰。積言、所生初禪地撰。依眼生
故。又問。有人、身在欲界及初禪地用二禪眼、乃至用彼四禪地眼、見自地色
及他地色。所生眼識、何地所撰。依如毘曇、皆初禪撰。彼宗之中、二禪已上
皆無眼識。借初禪識了諸色故。所言借者、二禪已上、所有眼識与初禪識、麁
細相似。是故言借。不從彼來、說為借矣。有人、身生二禪已上、用自地眼及
他地眼、見自地色及他地色。所生眼識、當知、亦是初禪所撰。類上可知。○
若論身識、初禪已還、即当地說。二禪已上、所覺之觸、必在当地。所生之識。
亦初禪撰云。

私云、鼻舌身三根、識境共限自地。無玄知故云三根。取□境对眼耳意、普緣
化地云無玄知。總相積之也。細論之時、身識緣化地、觸境無過。俱舍論云、

雖言次三皆自地、鼻舌身鼻舌身次句、委分別云身識自下地、是也。

俱舍論二云、鼻舌身三總皆自地。於中別者、謂身与触其地必同。識望触身、或自或下云。积件頌也。

【第九問】

問。大論意、意識可緣三世境乎。

章云、次約諸識明緣不同。如雜心說。色界二識識。乃至触亦然。諸余十三界、一向意識緣。○色等五塵、当分為彼五識所緣。意識通緣一切法故、亦得緣之。○成実法中、文無定判。人积不同。有人积言、与毘曇同。有人復言、六根六識及与法塵、与毘曇同、唯意識緣。色等五塵、唯五識緣、意識不緣。○大智論中、同此後积。拋実論之、意識通緣一切五塵。但不分了。何故得知。如人現在緣於十方一切色声香味触等。明知、通緣。所以不了、色香味等非意正境。是故不了。若得通緣、龍樹何故宣說意識不知五塵。积言、龍樹云不知者、不如五識知之顯了故、言不知。非全不緣云。

大乘義章第八抄

本云、天養元年十一月十九日始抄、同二十四日期畢之。始自保延二年、相当先妣四月二十四日遠忌、勤修三十講九箇年。于茲以義章兩卷、為其宛父、為小生等、遂歲抄集要文。而今年重病相纏、講筵遲怠、当于年迫愁以行之。非是宿病之愈、不闕当年之勤也。七八兩卷馳筆抄之。老病危免、心肝如春。生年六十一、後見哀憐矣。

天養元年十一月二十四日 權大僧都 寬信記

治承元年九月十日 隆円書之。二二了。

文和四年乙未十一月二十九日書之了。小比丘 寥海三七

註

(1) 同書の概要については、拙著『中世東密教学形成論』第五部(法藏館、二〇一八)参照。また、『大乘義章』の修学と東密論義への影響については、拙稿「東密論義と南都教学—三論宗との関係を中心に—」(楠淳澄・野呂靖・龜山隆彦編『日本仏教と論義』法藏館、二〇二〇)で言及した。

(2) 東大寺や真福寺大須文庫等が所蔵する三論宗聖教については、伊藤隆壽『三論宗の基礎的研究』付録「三論宗関連典籍目録」(大蔵出版、二〇一八)に一覧化されている。なお、真福寺に東大寺東南院の聖教が多数伝来していることは夙に知られている。その詳細については、福島金治「建武政権期東大寺の東国所領獲得交渉—真福寺所蔵『八生一生得菩提事』紙背文書を通して—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇四集、二〇〇三)、近本謙介『東南院御前聖教目録』解題(『真福寺善本叢刊』第二期)『真福寺古目録集』二所収。臨川書店、二〇〇五)、阿部泰郎『文庫第二目録』解題(同上所収)等に詳しい。また、『大乘義章』は三講の一つである「法勝寺御八講」でも修学の対象になっていた。このことについては、拙稿『法勝寺御八講問答記』所収の「三論宗関連論義」(『印仏研』六九—二、二〇二二)で考察を加えた。

(3) 同書の翻刻研究については、拙稿「日本における『大乘義章』の受容と展開—附 身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「二種生死義」翻刻」(金剛大学仏教文化研究所編『地論宗の研究』国書刊行会、二〇一七)、同「身延文庫蔵『大乘義章第九抄』所収「一乘義」翻刻」(『日本古写経研究所研究紀要』第五号、二〇二〇)、同「身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「四有義・四識住義・四食義・五陰義」翻刻」(同上第六号、二〇二二)等、参照。

(4) 共通の論題をめぐっては、「十八界義」第一問の議論が『義章問答』巻二・

第二十六問にも見出すことができることを指摘しておきたい。なお、「十八界義」第八問では、旁註に「天養元年東大寺三十講 理真」という記述があり、寛信が「大乘義章第八抄」を抄筆した同年に執行された東大寺の寺内法会で同論題が実修された事例を伝えている。

- (5) その詳細については、拙稿「身延文庫蔵『大乘義章抄』所引の文献・逸文について」(『印仏研』六七―二、二〇一九)参照。
- (6) 『法華義疏』の原文では、「持一」となっている。大正三四・四六五頁中。
- (7) 『法華義疏』の原文では、「身」となっている。同前。
- (8) 『法華義疏』の原文では、「或云集諸華」となっている。同前。
- (9) 『法華義疏』の原文では、「酒而」となっている。同前。
- (10) 『法華義疏』の原文では、「或云」となっている。同前。
- (11) 『法華義疏』の原文では、「持一」となっている。同前。
- (12) 『法華義疏』の原文では、「華」となっている。同前。
- (13) 『法華義疏』の原文では、「酒而」となっている。同前。
- (14) 『法華義疏』の原文では、「好故也」となっている。大正三四・四六五頁下。
- (15) 『法華義疏』の原文では、「因醜立名」がない。同前。
- (16) 『法華義疏』の原文では、「須」となっている。同前。
- (17) 『法華義疏』の原文では、「以其」となっている。同前。
- (18) 『法華義疏』の原文では、「信也」となっている。同前。
- (19) 『法華義疏』の原文では、「戲樂」となっている。同前。
- (20) 『法華義疏』の原文では、「法」となっている。同前。
- (21) 『大乘義章』の原文では、「羅」となっている。大正四四・六二六頁中。
- (22) 『大仏頂経』では、「其所ト」となっている。大正一九・一四六頁下。
- (23) 『大仏頂経』では、「且」となっている。大正一九・一四七頁上。
- (24) 『大乘義章』の原文では、「独」となっている。大正四四・六二七頁下。
- (25) 『菩薩地持経』の原文では、「凡夫」が「無煩天」となっている。大正三〇・八九七頁中。

(26) 『大吉義神呪経』の原文では、「摩醯首羅」となっている。大正二一・五七〇頁上。

- (27) 『大乘義章』の原文では、「問曰」となっている。大正四四・六二八頁中。
- (28) 『大乘義章』の原文では、「謂」となっている。大正四四・六二九頁上。
- (29) 『大乘義章』の原文では、「品」となっている。同前。
- (30) 『雜阿含経』の原文では、「汝」となっている。大正二・三六三頁上。
- (31) 『大乘義章』の原文では、「樹香」となっている。大正四四・六三一頁上。
- (32) 『成実論』の原文では、「香耶」となっている。大正三二・二七三頁中。
- (33) 『成実論』の原文では、「緑」となっている。同前。
- (34) 『成実論』の原文では、「又」となっている。同前。
- (35) 『大乘義章』の原文では、「煖」となっている。大正四四・六三一頁中。
- (36) 『大乘義章』の原文では、「軟」となっている。同前。
- (37) 『大乘義章』の原文では、「洪」となっている。同前。
- (38) 『大乘義章』の原文では、「適」となっている。同前。
- (39) 『大乘義章』の原文では、「不疲極」となっている。同前。
- (40) 『大乘義章』の原文では、「老」となっている。同前。
- (41) 『大乘義章』の原文では、「三十五者」となっている。
- (42) 『成実論』の原文では、「不疲極」となっている。大正三二・二七四頁中。
- (43) 『成実論』の原文では、「斂」となっている。大正三二・二六八頁上。
- (44) 『成実論』の原文では、「而」がない。同前。
- (45) 『大乘義章』の原文では、「為」となっている。大正四四・六三二頁下。
- (46) 『成実論』の原文では、「諸塵」となっている。大正三二・二六六頁上。
- (47) 『成実論』の原文では、「諸根所得也」が「根之所得」となっている。大正三二・二七二頁中。
- (48) 『大乘義章』の原文では、「言」となっている。大正四四・六三三頁下。
- (49) 『俱舍論記』の原文では、「此並可知」が「此知可並」となっている。大正四一・三二六頁中。

- (50) 『俱舍論記』の原文では、「観段食」となっている。同前。
- (51) 『大乘義章』の原文では、「明」となっている。大正四四・六三四頁下。
- (52) 『大乘義章』の原文では、「定」となっている。大正四四・六三四頁上。
- (53) 『大乘義章』の原文では、「得」がない。同前。
- (54) 『大乘義章』の原文では、「所」となっている。大正四四・六三四頁中。

※本翻刻の掲載に当たっては、身延山久遠寺、身延文庫、同文庫主事の渡辺永祥先生、大本山東大寺、東大寺図書館、同図書館の坂東俊彦先生に格別なるご配慮を賜った。ここに衷心より感謝申し上げます。

※本研究は、JSPS 科研費 JP19K00068 の助成を受けたものである。